

## [55] ポリシヨイ・バレエ団 2002

### ～遺産継承と新風と～

2002年10月12日 東京新聞 夕刊

バレエのジャンルでは、年毎に世界のどこかで新しい試みを打ち出している。そんななか、ロシア・バレエはもう過去のものになったかと思うこともないではない。

だが今回のポリシヨイ・バレエ団の公演（9月25日～10月6日、東京文化会館）では、早くも『眠れる森の美女』のプロローグ、誕生祝いの場面で、久しぶりに本物のロシア・バレエを観たという感動に胸が躍った。

昨今では、全幕でも一幕でもこの「美女」に会う機会が多いのだが、何といってもこれは帝室ロシア・バレエの最高峰を記す作品。ソリストやコール・ド・バレエの水準が高く、かつ陣容もしっかりしていないと、ほんとうの魅力が輝かない。それにチャイコフスキーの音楽も重要な役割を担っているから、演奏がいいかげんだと感動も半減。となると、満定のいく舞台にはなかなかお目にかれない。

オーロラ姫を踊った四人のバレリーナのなかで、私が観たのはニーナ・アナニアシヴィリだった。もはやベテランの風格で、いまさら愛らしいオー

## [55] ポリシヨイ・バレエ団 2002

### ～遺産継承と新風と～

2002年10月12日 東京新聞 夕刊

ロラ姫ではと思わないでもなかったが、姿を現すや舞台が明るくなるスター性は、ちよっと他に類がない。

それにしても、あのポリシヨイのバレエ・ダンサーたちの手足の長さ、美しさはどうだろう。少女でない私でも夢見心地で劇場を出たことだった。

しかし今回に限っては、私はもう一つの演目『スパルタクス』の躍動美に軍配を上げる。五十年の長きにわたってポリシヨイ・バレエの芸術監督を勤めたグリゴロヴィチの代表作だ。ニジンスキー以来、ロシア・バレエは優れた男性ダンサーを輩出しているが、ダイナミックな男性舞踊を前面に押し出して重厚な物語バレエを作ったという意味では、グリゴロヴィチは筆頭の振付家である。

彼の振付による『スパルタクス』や『石の花』『イワン雷帝』などによって、ポリシヨイ・バレエは世界でも類を見ない、際立つスタイルを獲得することができた。

『スパルタクス』の物語の骨組みはローマ時代の史実。幕開けからローマ軍を演じる男性群舞が圧倒的だ。身振り手振りで筋を語ることをせず、

## [55] ボリショイ・バレエ団 2002

### ～遺産継承と新風と～

2002年10月12日 東京新聞 夕刊

すべてを躍動的なダンスで描くのがグリゴロヴィチの手法で、舞台の上にも強い風が流れているような印象がある。

男性群舞の振りはむしろ単純、直線的な動きで余分な装飾はほとんどないのだが、運動量が非常に大きい。ガンサーにとっては疲れる作品だが、それだけに底の方から高揚感のかたまりが突き上げてくる。

わけでもヒーローのソロがじつに鮮やかだ。私が観た日（5日）はベロゴロフツェフだったが、スパルタクスが蜂起を決断する場面で、舞台下手から高い連続ジャンプを繰り返して、突風のように消えた。そのジャンプのあまりの高さに自分の眼が信じられず、もう一度観たいと念じた瞬間、今度は上手から同じようなジャンプで現れ、光芒を引いて消えた。いままで多くの跳躍を観たけれども、これほど高いのは初めてではないかと思う。当然ながら、会場は感嘆と喝采の渦。

たくましい男性像に対して、女性の踊りのしなやかさもまたグリゴロヴィチの特色の一つである。特にパ・ド・ドゥでは、男性のリフトに支え

## [55] ボリショイ・バレエ団 2002

### ～遺産継承と新風と～

2002年10月12日 東京新聞 夕刊

られたバレリーナが、彼の頭上、腕いっぱいの高さで身をのけぞらせ、あるいは横真一文字になって、あらゆる姿態の妙を見せる。スパルタクスの恋人（アントニーチェワ）のたおやかさとは別に、ローマの將軍の愛人役のグラチョーワが、演技力とテクニクの二つの武器を駆使して妖艶な悪女を演じ、圧倒的な存在感。その表現はとても現代的である。

ボリショイ劇場管弦楽団がハチャトリアンの多彩な音楽を表情ゆたかに演奏し、『眠れる森の美女』同様、音楽の面からも陶醉が深まる公演だった。

偉大な遺産を受け継ぎつつ、ボリショイ・バレエは時代の新しい空気を呼吸している。